

## 現代日本語の格助詞と接続助詞の機能的重なり － 実例観察と容認度調査から －

天野 みどり  
大妻女子大学

### 要 旨

本研究は、現代日本語の逸脱的特徴を持つ文を研究対象とし、流動的な現代日本語の実態の中に、言語の規則性が生まれることを考察する。現代日本語には、格助詞ガ・ヲが逆接の接続助詞に変化しているように見える逸脱的な例があるが、本研究では、実例の観察と容認度に関する内省判断調査により、逸脱的なノガ・モノガ文は特定の自動詞構文からの、ノヲ・モノヲ文は特定の他動詞構文からの拡張であることを示す。本研究では特にモノガ・モノヲについての新たな調査を加えることにより、この格助詞ガ・ヲの拡張が前置する名詞化辞の異なりに関わらず起ることを示す。また、これらには、主格・対格を示す格助詞の機能と逆接を表す接続助詞の機能の重なりが感じられるが、それは、いずれも基となる構文的意味に逆接の意味が読み込まれることによることを明らかにする。

### 1. はじめに

本研究は、言語が流動的であることを前提とした文法研究である。実際の現代日本語の使用には変化途上や誤用と推察される表現等、様々なものが含まれ、そうした多様な言語使用の中から文の形と意味の結びつきに関する規則性は生まれる。こうした流動性を前提とした文法研究を行うために、本研究では実例観察調査と、その実例間にある容認度の異なりを捉える内省判断調査の、二つの研究手法を用いる<sup>(1)</sup>。

考察対象は、現代日本語の、格助詞から逆接的意味の接続助詞への拡張現象である。主格助詞ガを用いたノガ・モノガ、対格助詞ヲを用いたノヲ・モノヲが、直接結びつく述語句を欠き、接続助詞ノニ・ノニ対シテと似た接続助詞的用法へと拡張しつつあるように見える現象を扱う。日本語の歴史上格助詞から接続助詞へと変化した事象があることは、多くの研究により明らかにされている。例えば「太郎は来たが次郎は来なかった」のような逆接の接続助詞ガの歴史については、石垣（1955）により、主格助詞ガが

9世紀に「思ふが悲しく侍るなり」のように述語句を承けるようになり、12世紀末までに第二の「が」が後続に顕現する形式[[～述語句+が] ～が述語句]が現れ、13世紀には前件と後件が〈逆戻〉の意味となる例が現れたとされている<sup>(2)</sup>。本研究は、このような現象が現代語の格助詞にも新たに見られることを論じる。

2節では現代語のガ・ヲの接続助詞化に関する先行研究を整理する。3節では特にモノヲに関し新たな実例観察を加え、ノガ・モノガ・ノヲ・モノヲの特徴を整理し、それぞれの構文的意味を示す。4節では特にモノヲに新たな内省判断調査を加え、従来述べられてきたノガ・モノガ・ノヲと同様にモノヲの逆接性を位置づける。5節は本研究のまとめと今後の課題・展望を述べる。

## 2. 先行研究

### 2.1 接続助詞的なノガ・モノガ

まず、格助詞ガに関わる接続助詞的なノガ・モノガの先行研究を見ておく。

- (1) さっきから警報が鳴り止まなかったのが、やっと止まった。
- (2) ろくに実家に帰ることはなかったのが毎日、病院の公衆電話から家族の声を聞いた。  
(天野 2014 より『朝日新聞』)
- (3) 50年代初めは、カラーテレビを国内で生産し、輸出していたものが、60年以降海外生産が急増する一方輸出が減少し、海外生産が国内生産を上回るようになった。  
(天野 2021a より『労働白書』)

作例(1)は、「さっきから警報が鳴り止まなかった」の節がノにより名詞化され、主格として述語句「止まった」と統語的關係を結ぶ、ごく普通の主格ガの例である。

他方、(2)(3)は接続助詞的なノガ・モノガの実例である。(2)の述語「聞いた」から予測される主格の意味は動作主(聞く人)であるが、実際の主格は下線部のように非動作主である。文脈上「私が」等を補い解釈できるが、その場合にはこの下線部「ろくに実家に帰ることはなかったのが」と結びつく述語がない。(3)は、モノガの後に三つのガ格が現れる。モノガの後続の述語はこれらと統語的關係を結び、モノガと

結びつく述語はない。また、(2) (3) は、ノガ・モノガを逆接の接続助詞ノニと言い換えても大きく意味が変わらないように感じられるが、ノニに比べ容認度が下がる。

こうした特徴を持つノガ・モノガを天野 (2014, 2021a) は接続助詞的なノガ・モノガとした。

(4) 天野 (2014, 2021a) の接続助詞的なノガ・モノガの文

- ①ノガ・モノガの後に、それと直接結びつく述語がない。第二のガが現れることもある。
- ②ノニと言い換えられるような逆接の意味が感じられる。
- ③文の容認度が比較的高いものから低いものまであり不安定である。

この種のガについては、寺村 (1978) が「後に出てくる動詞が類型化しにくい」ためもはや「格」という概念では押さえきれない (寺村 1992 所収 p.333) と述べ、クー (1988) がこれらに《変遷性》の意味があることを示した。しかし、この意味の詳細やそれを規定づける特徴・生起理由等は考察されてこなかった。また、黒田 (1999) がもはや「格」ではなく「副詞節でしかありえないことは明白」 (p.37) と述べつつも「歴史的な淵源である形式的な格助詞としての「が」 (中略) の性格を引き継いでいる」 (p.88) と述べ、格助詞からの拡張であるとした点が注目されるが、どのような性格を引き継いでいるかについては述べられていない。

それらをふまえ、天野 (2014) は接続助詞的なノガについて実例の観察を行い、次のような共起要素の特徴があることを述べている。

(5) 接続助詞的なノガの共起特徴 (天野 2014)

- a 変化後の状態を表す句の共起が多い。 (62%)
- b 「～タノガ」等確定や確実な予定を表すものが多い。 (98%)
- c 変化の前と後の時点、時間的推移のありかた等を示す表現の共起が多い。 (98%)

ここから、天野（2014）は接続助詞的なノガの文は、同じ特徴を持つ（6）（＝（1））のような《変遷》を表す自動詞構文からの類推で成り立つものとした。

（6）さっきから警報が鳴り止まなかったのが、やっと止まった。（＝（1））

（6）は、ノガが主格として「止まる」と結びつく通常の主格節構文であるが、（5）に挙げた a・b・c のすべての特徴が見られる（a の特徴（「止まった」）・b の特徴（「～たのが」）・c の特徴（「さっきから」「やっと」））。天野（2014）はこれを [A ノガ B（＝変化自動詞述語）] の形で〈[ある状態 A] が [異なる状態 B] に変化する〉ことを表す、《変遷》を表す自動詞構文の特徴だとし、接続助詞的な（2）（3）は、この（6）のような通常の《変遷》自動詞構文の意味を表すものとして理解されることとしたのである。さらに、天野（2021a）は、同じことが接続助詞的なモノガにも言えることを実例により示している。

つまり、接続助詞的なノガの文（2）は、〈[ろくに実家に帰ることがなかったような家族と疎遠な状態] が [毎日電話して家族の声を聞くような親密な状態] に変化した〉ことを表し、接続助詞的なモノガの文（3）は、〈[50 年代初めはカラーテレビを国内で生産し輸出していた] 状態が [60 年以降輸出が減少し、海外生産が国内生産を上回る] 状態に変化した〉ことを表しているということである。

この天野（2014, 2021a）で重要なことは、この現象に、天野（2002）で述べた類推の過程があるとしたことである。すなわち、（2）（3）のような文は、ノガ・モノガと統語的に結びつく述語がないという逸脱点があるが、何ら逸脱点のない《変遷》自動詞構文を類推のベースとし、欠けている述語に《変遷》自動詞構文の述語の意味を写像することで成り立つものとしたのである。（2）（3）のような文の容認度の不安定さも、類推による創造的な解釈のしにくさによると説明されている<sup>(3)</sup>。

（7）類推による創造的な解釈

[実家に帰ることはなかった のが 公衆電話から家族の声を聞いた]

↓創造的な解釈

[実家に帰ることはなかった のが 公衆電話から家族の声を聞くように変化した]

つまり、接続助詞的なノガ・モノガの文は、《変遷》自動詞構文として解釈され、そのガは主格の意味を保持するものだということである。

## 2.2 接続助詞的なノヲ・モノヲ

次に、格助詞ヲに関わる接続助詞的なノヲ・モノヲの先行研究を見ておく。

天野（2011, 2023）は、以下の特徴のあるものを接続助詞的なノヲ・モノヲと呼ぶ。

(8) 天野（2011, 2023）の接続助詞的なノヲ・モノヲ

- ① ノヲ・モノヲの後に、それと直接結びつく述語がない。第二のヲが現れることもある。
- ② ノニと言い換えられるような逆接の意味が感じられる。
- ③ 文の容認度が比較的高いものから低いものまであり不安定である。

(9) は、ヲが通常の格助詞の場合の作例、(10)～(12)は接続助詞的なノヲ・モノヲの実例である。

(9) 出て行こうとするのを、遮った。

(10) アドリアーナは私の宿泊先のホテルまで送ってきてくれたのを、まだ時間があるから、このザッテレの河岸を散歩しようということになったのだった。

(天野 2011 より「ザッテレの河岸で」)

(11) 下宿のすぐ近くから乗ればいいものを、わざわざソウル運動場まで十分の道を歩いて梨大の女子学生がたくさん乗るバスに乗った。

(天野 2023 より『私の朝鮮語小辞典』)

(12) 死者が自らの自浄努力で溶けていこうとしているものを、遺族の方々がその自然摂理の作用を阻止してはなりません。

(天野 2023 より『間違いだらけの「正しいお墓」』)

これらについて寺村（1978）、クー（1988）、黒田（1999）、加藤（2006）等は「接続助詞的」ないし「接続助詞」であるとした。寺村（1978）はこれらには「事態の自然な進展が、あるできごとによってさえぎられる」（p.333）意味があるとし、それを受け継いだクー（1988）が《逆行性》という概念で説明していること、黒田（1999）がこうしたノヲが格助詞ヲを淵源とするものであるとしたことが注目される。しかし、これらの研究には、接続助詞的なノヲ・モノヲの文に「さえぎられる」意味（＝《逆行性》）が生じる理由や通常のヲ格助詞との関係についての説明がない。

これに対し、天野（2011）は、逸脱点のない通常他動詞構文である《対抗動作》他動詞構文との関係を述べている。例えば（9）の「出て行こうとするのを」は出来事の進行する方向性を表し、それと結びつく述語句「遮った」はその方向性を遮ったり止めたりする意味を表す。天野（2011）はこのような意味の他動詞文を構成する他動詞が多数あることを示し、それらの作る他動詞文が一つの類型、《対抗動作》他動詞構文として確立していることを述べた。その上で、接続助詞的なノヲの文は、直接結びつく述語が欠けていながら、この《対抗動作》他動詞構文をベースとしその構文的意味を写像することにより成り立つものとしている。また、天野（2023）はモノヲの（12）についても《対抗動作》他動詞構文の意味が解釈されるとしている。

さらに、天野（2023）は、接続助詞的なモノヲ文には《対抗動作》の他に《仮定行為非実現》を表す用法があるとした。通常他動詞文の中には〔～ば・なら・たら（等仮定を表す句）＋～ものを＋述語〕の形で〈ある行為をすればよい結果が出るのにその行為をしない〉という意味を表すものがある。これを《仮定行為非実現》と呼ぶとすると、接続助詞的なモノヲ文には、この用法が多く見つかることを実例観察により示している。

しかし、天野（2023）では、接続助詞的なモノヲの二つの用法《対抗動作》と《仮定行為非実現》の関係については述べられていない。また、この接続助詞的なモノヲの《仮定行為非実現》の用法が、《対抗動作》他動詞構文だけではなく、他のものも含めた、通常他動詞構文全体とどのような関係にあるのかについては、考察されていない

のである。

ここまで、格助詞ガに関する接続助詞的なノガ・モノガ、格助詞ヲに関する接続助詞的なノヲ・モノヲについての先行研究を見てきた。これまで、接続助詞的なノガ・モノガは格助詞ガの拡張、接続助詞的なノヲ・モノヲは格助詞ヲの拡張として考察されてきたことがわかる。その中でも、天野の一連の研究は、通常のカ・ヲの構文が鋳型となり、脱的点を持つノガ・モノガ・ノヲ・モノヲが、不自然さを持ちながらもその構文からの類推で成立することを示すものであり、流動的な現代語の状態をうまく説明するもののように思われる。

しかし、その研究ではモノヲについての説明が不十分である。モノヲには、ノヲにはあまりない《假定行為非実現》の用法が多くあるように、ノヲ・モノヲを全く同じ接続助詞的用法の形として括ることはできない。格助詞ガ・ヲから接続助詞への拡張を考察する際には、ガ・ヲに前置する準体助詞（＝名詞化辞）ノ・モノ・トコロ等の違いについても留意すべきなのである。本研究では主としてモノヲに関するこの課題を検討した上で、格助詞ガ・ヲの接続助詞的用法への拡張の問題を再考することとする。

### 3. モノヲの再考と接続助詞的なノガ・モノガ・ノヲ・モノヲの整理

#### 3.1 接続助詞的なモノヲの文《假定行為非実現》の再考

天野（2023）は《假定行為非実現》の用法を細分し記述するが、それらの拡張の段階は示していない。本節では《假定行為非実現》の位置づけの準備として、この拡張の多様さを確認しそれぞれの拡張段階を考察する。まず、拡張の多様さを分類して示す。

##### (13) 拡張の観点からみた《假定行為非実現》の文の分類

###### ① 《假定＋一般的叙述＋ものを＋反假定行為》

・ さっさと始末すればわからなかったものを、始末しなかった。

###### ② 《假定＋定型叙述（いい）＋ものを＋反假定行為》

・ さっさと始末すればいいものを、始末しなかった。

###### ③ 《假定＋定型叙述/一般的叙述＋ものを＋非他動詞》

・ a さっさと始末すればいいものを、そのまま立ちすくんでいた。

・ **b** さっさと始末すればいいものを、うろたえていたのだった。

④ 《仮定+定型叙述/一般的叙述+ものを  $\varnothing$ 。》

・ さっさと始末すればいいものを  $\varnothing$ 。

(13) の①②はモノヲ節述語の観点から分けた。①は「わからなかった」のように様々な述語形式がモノヲに前置する類である。これを藤井 (2008) に倣い「一般的」叙述とする。他方、この様々な述語形式が「いい/よい」に定型化された類が②である。この①②はいずれも主節述語に他動詞が用いられ、全体で〈仮定される行為をしない〉意味を表す通常他動詞述語文だが、モノヲ節の述語の点では①②の順にパターン化が進んでいると言える。

③④はモノヲに続く主節述語の観点から①②とは異なるものとして分けた。①②の主節述語は他動詞であったが③④は非他動詞である。③は自動詞や形容詞等が現れる類であり、ヲ格とは結びつかず接続助詞的なモノヲの文に相当する。④はモノヲの後に述語がなくモノヲで終了する類である。これも本研究では接続助詞的なモノヲの文とする。

さらに、③の非他動詞述語によるモノヲの文には、**a・b**の二類が認められる。**a**類は非他動詞が意味的には〈すればいいものをしてしない〉の〈しない〉の意味 (=反仮定行為) を表すと解釈できるものである。例えば (13) ③a の例の自動詞述語句「立ちすくんでいた」は、そうすればよいと期待される行為に反する〈さっさと始末しない〉ことを意味的には表している。

これに対し (13) ③b では「さっさと始末すればよいものを」から予測される〈しなかった〉の意味は補って解釈され、その上で、モノヲの後の自動詞「うろたえる」は、〈すればよいものをしてしなかった〉という行為全体に対して〈うろたえていたからだ〉という話者の理由説明を追加したものと解釈される。つまり、主節述語の非他動詞は〈しない〉の意味を表しているわけではないのである。**b**類は、見かけ上モノヲの後続に述語があるものの意味的にはモノヲと関係せず、モノヲ中断節と言えるだろう。

**a**類は形式的に非他動詞でも意味的には〈しない〉の意味を表すので、拡張の段階か

らすると①②に近い。しかし b 類は形式的に非他動詞であるだけでなく、その意味が〈しない〉ではなく、しない意味を織り込んだ事態全体に対する、話者の評価等である点で、a 類よりも拡張の段階が進んでいると言える。

さらに、(13) の④はモノヲで終了しその後と言語形式はない。次の (14) はモノヲで終了しているが、〈黙っていないで言った〉のような反仮定行為の意味が補なわれ、そのような意図的行為全体に対する話者のマイナス評価の意味 (=ひどい人だ等) が感じられるだろう。

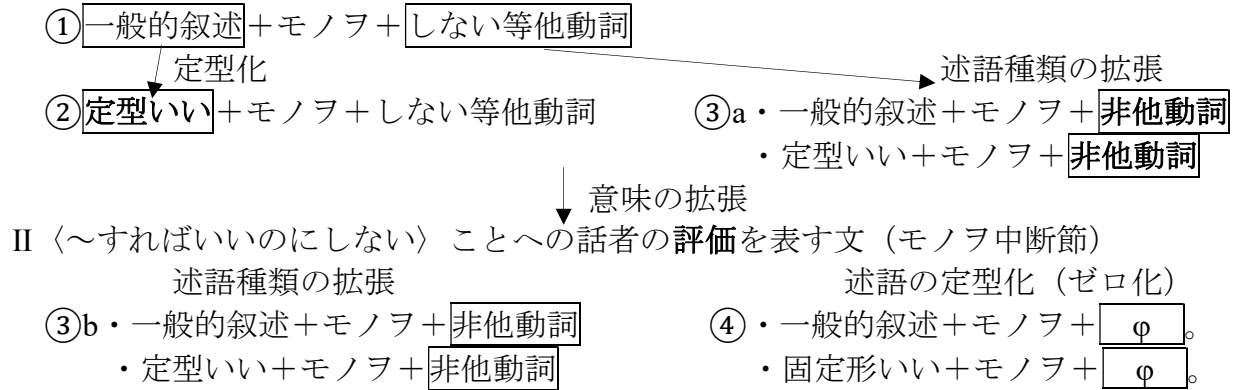
(14) A:肉食べれたのとか誰かにゆわれた覚えがある/B:あーそうか/A:うん/B:黙ってりゃいいものをな g (天野 2023 より CEJC・K009\_003 表記改: 天野)

このように、モノヲで終了しているにも関わらず主節述語の意味 (=〈仮定された行為をしない〉) を補って解釈できるのは、それほどまでに《仮定行為非実現》の用法が定着しているからである。さらにその意味を含んだ事態全体に対する、話者のマイナス評価の意味までがこの形式に固着していることから、④は、最も拡張の進んだものと言えるだろう。

以上、接続助詞的なモノヲの文のうち《仮定行為非実現》の意味を表す用法について、③非他動詞と結びつくモノヲに二類 (a 非他動詞の述語部分の意味を〈しない〉の意味に解釈する類、b 意味的にはモノヲで中断し〈しない〉の意味を補い解釈する類) があり、④モノヲ節で終了する場合は③b の中断節用法に匹敵する話者の主観 (〈しない〉ことに対する評価・説明・注釈等) の含意がある。通常その他動詞構文からの拡張と言っても、①から②はモノヲ節述語の定型化、①から③a は主節述語の非他動詞化、①から③b はモノヲで中断し主節述語で話者の評価等を表すパターンの獲得、①から④はモノヲで終了し話者の評価を含意するパターンの獲得と多様である。これを以下のように図示しておく。

(15) 《仮定行為非実現》を表す他動詞文の拡張

I 〈すればいいものをしない〉を表す文 (主節述語がある場合)



### 3.2 《假定行為非実現》と《対抗動作》の関係

では、このモノヲの《假定行為非実現》用法の拡張は、格助詞ヲの接続助詞化の過程として一般化できるだろうか。これまで格助詞ヲの接続助詞化として説明されてきたノヲの《対抗動作》用法と同様の説明ができるのだろうか。天野（2023）は接続助詞的なモノヲの文にも《対抗動作》用法があり、モノヲの《假定行為非実現》用法とは共通点があるとしているが、その共通点とはどのようなものなのだろうか。両者の関係性については、より詳しく論じる必要がある。

3.1 で考察したように、《假定行為非実現》用法においてもモノヲと結びつく述語には意図的他動行為の意味がある。(15) Iに③a が位置づけられるように、モノヲと結びつく述語が非他動詞に拡張していても、すればいいと假定されることを意図的に〈しない〉という意味が創造的に解釈される。また、IIの、主節述語が見かけ上存在する③b およびモノヲで文が終了する④も、モノヲと直接結びつく述語はなくても、〈しない〉という意図的他動行為の意味が補われる。こうした意図的他動行為の意味が《假定行為非実現》のモノヲ文に必要である証拠に、「晴れる」「咲く」のように主体の意図性のない動作だと容認度が低くなることが挙げられる<sup>(4)</sup>。

(16) ? 晴ればいいものを、晴れない。

(17) ? 桜が咲けばいいものを、旅行中にはとうとう咲かなかった。

この《假定行為非実現》用法の〈意図的行為〉は《対抗動作》用法にも抽出される意

味であり、この点が両者の共通点であると言える。しかし、共通点があると言うだけではなく、接続助詞的なモノヲの文の《假定行為非実現》の意味は、《対抗動作》の意味に含まれると言うべきである。《対抗動作》とは「遮る・止める・中断する…」のように、〈対象がしようとする方向や自然な流れを、主体が止めたり変えたりすること〉である。他方、《假定行為非実現》とは〈假定される行為をしないこと〉である。この後者の〈しない〉という意味も、假定される〈する〉という方向性を変える行為に他ならない。つまり、《対抗動作》・《假定行為非実現》のいずれにも、対象に対して変化を与える意図的行動行為の意味が共通してあるのである。後述するが、ノヲ・モノヲに逆接的な意味が生じるのも、これらの文に事態に変化を与え新しい事態を起こす意味があるためである。

### 3.3 《假定行為非実現》用法はなぜモノヲの文に拡張したか

接続助詞的なノヲ・モノヲの《対抗動作》用法・モノヲの《假定行為非実現》用法はいずれも他動詞構文の拡張用法であり、格助詞ヲの機能がその淵源にある。しかし、なぜ同じヲ格でありながら、ノヲではなくモノヲにのみ《假定行為非実現》の用法が多様に拡張しているのだろうか。この偏りは、拡張を推し進める要因として格助詞ヲに起因する一般的要因と、ノ・モノの違いに起因する個別的要因があることを示唆する。

まず、本当に現代語においてノヲの《假定行為非実現》用法はないと言ってよいかを確認しておく。(18)はノヲの実例である。

(18) リンゴも安かったけれども、私たちが儉約だったのです。皮のまま二つに割って分ければいいのを、どうしたことか、皮をむいて分けたようです。

(坪田譲治・桂ユキ子 1996 『「あまから」抄』 富山房)

(18)は〈皮のまま分ければいいのを皮のまま分けなかった〉の意味を表し、ノヲを用いた《假定行為非実現》の実例と言える。このようにノヲにもこの用法の実例はある。しかし、(18)はモノヲに比べ容認度が下がるように思われる。だとすると、モノヲに比べノヲの《假定行為非実現》の確立度は低いということになる。試みに「ばいい

のを」の形式で『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の全資料を検索した結果、ノヲによる《仮定行為非実現》の実例と判断できるのは(18)の1例のみであったが、「ばいものを」で検索して得た《仮定行為非実現》の実例は52例であった。詳細な調査は今後の課題だが、この量的差からも、この用法がモノヲに偏っていることはわかる。

このような偏りがなぜ生じるかについては、モノヲの《仮定行為非実現》の用法の成立が歴史的に古いことを考慮すべきである<sup>(5)</sup>。

(19) 悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを

(『萬葉集』5・797)

(悔しいことだ、こうなる(筑紫で死ぬ)ことを知っていたならば国(故郷)をすべて見せるのに(見せていない)。)

モノヲの《仮定行為非実現》の用法が上代・中古といった古い時代から見られる一方、同じ時代に、準体助詞ノは成立していなかった。当時は述語の連体形に直接ガやヲが接続していたのである。

(20) 程なく罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るめり。

(青木 2018 より『竹取物語』)

(21) かの白く咲けるをなむ夕顔と申しはべる。

(青木 2018 より『源氏物語』)

「思ふが」「咲けるを」のような述語の連体形が名詞化した句(=準体句)の性質を受け継ぎ、それに代わるものとして「思ふのが」「咲けるのを」が成立したのは近世初期であるとされる(信田 1970, 青木 2016, 2018 等)。このように、準体助詞モノの歴史がノに比べて長いということは、より多様な拡張を生み出してきた一つの理由と考えられる。

しかし、単純にノヲよりもモノヲの成立が早いというだけではなく、より重要な理由は、準体助詞としてのモノとノの性格の異なりにある。準体助詞モノとノの異なりは現

代語の記述的研究でも考察されている。寺村（1981）はコトとの比較においてモノの本質的意味を物理的・心理的な「具体的存在」とし、坪根（1996）は終助詞・接続助詞のモノ・モノナラ・モノノ・モノヲにはモノの持つ《一般的》という意味が共通に関与すると述べる。他方、ノについては佐治（1993）がコトとの比較において「事態をそのまま、何の意味も付け加えずに体言化」（p.9）するものとし、大島（2010）が「名詞のもつ情報を介することなく、「の」が導く節が直接に主文事象と関係する」（p.263）と述べる。つまり、現代語の準体助詞のモノは「具体的存在」「一般的（事物）」という実質的意味を持つのに対し、ノは実質的意味を持たず名詞化という機能だけを果たすことが、先行研究により記述されているのである。この、現代語に見られる準体助詞モノとノの意味の異なりは、青木（2018）が述べるように、ノは「～思ふが」「～咲けるを」のような準体句の用法をそのまま受け継いだ「純然たる名詞化（nominalization）の機能を担うものとして生み出されたもの」（p.143）ということに帰するだろう。

早くから成立を見たモノヲの《假定行為非実現》の用法は、モノが実質的に表す〈一般的に認められる事物〉という意味に支えられ、〈〈その行為をすることが望ましいと一般的に・普通に・自然に考えられる行為〉を、意図的にしない事態〉を表す形式として使用され、定着し、現在に至るものと考えられる<sup>(6)</sup>。モノヲの《假定行為非実現》の用法が成立していた同じ時期に、モノやノを介さない〔準体句+ヲ〕の形式でも、他動詞構文の拡張として（つまり、ヲの表す対象に対する意図的行為を表すものとして）、時には同じ意味を表した可能性もある（現代語でもそれを受け継いだ形としてノヲがこの意味を表す実例も（18）のように存在する）。しかし、〔準体句+ヲ〕にはモノに匹敵する実質的意味がないために、明確に《對抗動作》とは異なる用法として《假定行為非実現》の用法がパターン化することがなかったのではないだろうか。このように、現代語における《假定行為非実現》の用法の偏りは、ノとモノの異なりが引き起こしたものと考えられるのである。さらに、モノヲの《假定行為非実現》の用法の定着が進んだ結果、ノヲとモノヲの間に同じ接続助詞的な用法ではありながらノヲは《對抗動作》の拡張、モノヲは《假定行為非実現》の拡張といった機能分担が生じ、現在に至ると見ることできる。

以上のモノヲについての考察は、格助詞ヲの接続助詞的拡張には、ノ・モノの異なりという個別事情による偏りがあることを示している。同様の偏りが格助詞ガの接続助詞的な機能への拡張に関しても生じていることは、すでに天野（2021a）で明らかにされている。モノガの《変遷》自動詞構文の出現そのものがノガよりも少なく、また、その出現は「白書」という特殊なジャンルに偏っている<sup>(7)</sup>。このような偏りはありつつも、逸脱点を持つ接続助詞的なノガ・モノガ文は、《変遷》自動詞構文の、ある状態から異なる状態に変化する意味を表し、接続助詞的なノヲ・モノヲ文はある方向性に変化を与える《対抗動作》他動詞構文（《仮定行為非実現》を含む）の意味を表すと整理できる。ノ・モノの違いによる個別的用法の偏りはありながらも、接続助詞的なノガ・モノガは主格助詞の、接続助詞的なノヲ・モノヲは対格助詞の意味からの拡張という一般化ができるのである。

#### 4. 内省判断調査による考察

##### 4.1 調査概要

次に、内省判断の手法を用いて、接続助詞的なノガ・モノガ・ノヲ・モノヲが接続助詞ノニ・ノニ対シテとどのように異なるかを明らかにする。注1に示したように、2018年から2021年の内省判断調査に加え、本研究では2023年に実施したモノガ・モノヲの4回の調査結果を考慮する。本研究の新しい考察点は、それぞれの形式とノニ・ノニ対シテとの違いではなく、2018年～2023年に行った9回の内省判断調査のすべてを用いて、名詞化辞モノ・ノの違いに関わらない、格助詞ガ・ヲの接続助詞的用法と接続助詞ノニ・ノニ対シテとの異なりを確認することである。

調査では、調査協力者に複数の対象例文を示し、それぞれの容認度を①自然で問題なく容認できる②少し不自然さを感じるが容認できる③全く不自然で容認できない、の三段階で判定してもらった。調査結果は、判定結果を①2点、②1点、③0点に換算（小数点第3位を四捨五入）し、平均点を例文冒頭の丸括弧内に表示する。この数字が2点に近いほど容認度が高く、0点に近いほど容認度が低いということになる。本研究では、便宜上1.5以上を高い容認度と判断する。また、調査結果の例文末尾の丸括弧内

には調査協力者数を記す。

## 4.2 容認度を左右する要因

まず、接続助詞的なノガ・モノガ・ノヲ・モノヲと、ノニの容認度が大きく変わる場合を示す。

- (22) a (1.72) 4月であるのに、とても寒い。(65人)  
b (0.10) 4月であるのが、とても寒い。(20人)  
c (0.06) 4月であるものが、とても寒い。(33人)  
d (0) 4月であるのを、とても寒い。(70人)  
e (0.05) 4月であるものを、とても寒い。(59人)
- (23) a (1.92) 頑張って地震対策したのに、タンスが倒れた。(59人)  
b (0.15) 頑張って地震対策したのが、タンスが倒れた。(20人)  
c (0.03) 頑張って地震対策したものが、タンスが倒れた。(33人)  
d (0.10) 頑張って地震対策したのを、タンスが倒れた。(20人)  
e (0.14) 頑張って地震対策したものを、タンスが倒れた。(65人)

(22) (23) とともに二重下線を付したようにノニの容認度は 2 点に近く極めて高いが、それ以外は 0 点に近く極めて低い結果となった。实例観察では接続助詞的なノガ・モノガ・ノヲ・モノヲの实例をノニに換えても大きく意味は変わらないと述べた。しかし、逆に容認度の高いノニをノガ・モノガ・ノヲ・モノヲに換えると、容認度が極めて低くなる場合があることがわかる。(22) (23) は《変遷》・《对抗動作》の意味を表す動詞類が主節述語に用いられず、またそのような意味の創造的な解釈がしにくいためノガ・モノガ・ノヲ・モノヲの容認度が低いものと考えられる。

他方、同じように《変遷》・《对抗動作》の意味を表す動詞類が主節述語に用いられない文であっても、容認度が相対的に高く判定されるものもある。(24) (25) はいずれも主節述語が(22)と同様に非動詞述語であるにも関わらず、太下線部が示すように(24)はノガ、(25)はノガ・モノガの容認度が(22)より高く、その上がり方も

他の逸脱的形式より大きい。(22) で極めて低い容認度であった b~e の例文末の〈 〉内に(22) と比べた増加点を記す。その後、その増加点・減少点が2点のうちに占める割合を%で示す。

- (24) a (1.93) 千代田区は昼間人口が約 85 万人であるのに対して、夜間人口は約 6 万人である。 (59 人)
- b (1.07) 千代田区は昼間人口が約 85 万人であるのが、夜間人口は約 6 万人である。 (16 人) 〈+0.97、48.5%〉
- c (0.18) 千代田区は昼間人口が約 85 万人であるものが、夜間人口は約 6 万人である。 (33 人) 〈+0.12、6%〉
- d (0.06) 千代田区は昼間人口が約 85 万人であるのを、夜間人口は約 6 万人である。 (70 人) 〈+0.06、3%〉
- e (0.12) 千代田区は昼間人口が約 85 万人であるものを、夜間人口は約 6 万人である。 (59 人) 〈+0.07、3.5%〉
- (25) a (1.63) 昨日の気温が 25 度だったのに対して、今朝の気温が 26 度だ。 (32 人)
- b (1.22) 昨日の気温が 25 度だったのが、今朝の気温が 26 度だ。 (16 人) 〈+1.12、56%〉
- c (0.42) 昨日の気温が 25 度だったものが、今朝の気温が 26 度だ。 (33 人) 〈+0.36、18%〉
- d (0.06) 昨日の気温が 25 度だったのを、今朝の気温が 26 度だ。 (32 人) 〈+0.06、3%〉
- e (0.20) 昨日の気温が 25 度だったものを、今朝の気温が 26 度だ。 (20 人) 〈+0.15、7.5%〉

天野 (2021b) は、接続助詞的なノガの文の容認度は類推のベースとなる《変遷》自動詞構文の意味の解釈のしやすさに相関すると説明し、容認度が相対的に高く判定された(24) b (25) bは、(22) b (23) bに比べ、「昼間人口」から「夜間人口」へ・「昨

日の気温」から「今朝の気温」へと、時間的な《変遷》の意味が解釈しやすいためとする。本研究ではモノガ・モノヲの調査を追加したが、モノガの容認度も (22) c (23) c よりも (25) c が他に比べて上昇することがわかった。今回の追加調査により、ノ・モノの違いを超え、格助詞ガが何らかの手かかりで《変遷》自動詞構文の主格と解釈できれば容認度が上がること、格助詞の意味が生きていることが確認されたことになる。実例観察の結果に示したように、モノガの《変遷》自動詞構文由来の接続助詞的用法の実例はノガに比べわずかだが、そのことが、この (24) (25) のモノガの、ノガよりも低い容認度の結果にも表れている。それでも、元々《変遷》の意味をベースとしないノヲ・モノヲでは (22) ~ (25) で一貫して容認度が極めて低いことを考え合わせれば、格助詞ガがその前置する名詞化辞の違いに関わらず《変遷》自動詞構文から接続助詞的用法を生み出す可能性を備えるものであると言える。

次に、本研究で新たに実施したモノヲ文の内省判断調査の結果から、ノ・モノの違いを超え、対格ヲの意味が解釈しやすければ容認度が上がるかを確認する。今回の調査から (26) (27) の接続助詞的なモノヲの容認度が比較的高いことがわかった。

- (26) (1.23) 死者が自らの自浄努力で溶けていこうとしているものを、遺族の方々がその自然摂理の作用を阻止してはなりません。(65人)

これは、第二のヲ句があるという逸脱はあるが、「溶けていこうとしている」という方向性を表す要素がモノヲの前に現れ、また、「阻止する」という《対抗動作》を表す他動詞が主節述語に用いられており、ベースとする《対抗動作》他動詞構文の意味が解釈しやすいためと説明できるだろう。

また、(27) は《仮定行為非実現》型の接続助詞的なモノヲ文である。

- (27) (1.08) 「あそこ」と、おれは指さす。そんなことをしなくとも、夜の闇の中に上がる炎は誰にも見えるものを、いくらかうろたえていたのだった。(65人)

(27) は前文脈に反仮定行為の「指さす」が現れモノヲと結びつく意図的な反仮定行

為の意味が解釈しやすい。この例も、ベースとなる他動詞構文の意味が解釈しやすいために容認度が高いと言えるだろう。

他方、容認度の低かった (22) c (23) cは、主節で表される事態が意図の関われない自然現象や生理現象〈4月であるコト〉〈とても寒いコト〉〈タンスが倒れるコト〉である。こうした場合には、ノニの容認度は高いがモノヲは低い。ここから、ノヲ同様にモノヲも他動詞構文の《対抗動作》・《仮定行為非実現》の意味に解釈しにくい場合は文として成り立ちにくいと言える。

従来接続助詞的なノガ・モノガ・ノヲ・モノヲは逆接の意味を表すように感じられ、ノニ・ノニ対シテに言い換えても大きく意味を変えないとされてきた。しかし、その逆接の意味は、天野 (2011, 2019, 2021b) が述べるように、ノガ・モノガの文は《変遷》自動詞構文が持つ〈ある人・ものの、ある状態が異なる状態に変化する〉意味により、2つの状態間の対比が際立つことから生じるものであること、また、ノヲ・モノヲの文は《対抗動作》他動詞構文 (《仮定行為非実現》他動詞構文を含む) の意味が持つ、〈予測される自然な方向性を遮ったり止めたり変えたりする〉意味により、二つの事態の間に逆接的意味合いが感じられることから生じるものであることが、本研究の考察でも明らかになった<sup>(8)</sup>。ノニ・ノニ対シテの文の全てを、ノガ・モノガ・ノヲ・モノヲの文に言い換えることは出来ないのであり、その理由は、ガ・ヲの格助詞の意味が生きているからである。

## 5. おわりに

本研究では、日本語文法論の重要な二つの研究手法である事例観察と内省判断によって、流動的な日本語の実態に潜む規則性の一端を明らかにした。従来、節に続き接続助詞のように機能するガ・ヲは、それと結びつく述語句を類型化することが困難なために格の概念では押さえきれないとされてきた。しかし、接続助詞的なノガ・モノガ文は元となる《変遷》自動詞構文の、接続助詞的なノヲ・モノヲ文は元となる《対抗動作》他動詞構文 (《仮定行為非実現》他動詞構文を含む) の意味を表すのであり、そのガ・ヲは格助詞としての意味を保持している。格の意味が接続助詞の意味に入れ替わっている

のではなく、格の意味に重ねて、逆接の接続助詞の意味が感じられるのである。それは、《変遷》自動詞構文・《対抗動作》他動詞構文（《仮定行為非実現》他動詞構文を含む）において、ガ節・ヲ節と主節との間に、既定の事態や予測される事態とそれに反する事態という逆接的な意味的關係が含まれることによる。逸脱的な特徴を持つ接続助詞的なノガ・モノガ・ノヲ・モノヲ文は、実例から明らかになる特徴や使用の偏り、内省判断調査から明らかになる容認度の異なりから、文を成り立たせるしくみとして、定着した構文をベースとする類推の過程があることが検証されたことになる。

本研究では、格助詞ガ・ヲが一般的に接続助詞的用法へと類推により拡張すると言えるかを明らかにするために、ノガ・ノヲだけではなくモノガ・モノヲの考察を加えた。さらに、今後の課題として、他の名詞化辞や形式名詞（トコロガ／ヲ・ハズガ／ヲ等）の考察を加え、この格助詞の一般化の妥当性を高めることが挙げられる。

また、最後に、本研究で用いた二つの研究手法は、言語研究のみならず言語教育の分野においても重要な視点をもたらすことも述べておきたい。流動的な実態を持つある特定言語を教育するには、実例観察で実態を把握し、指導者の言語直観でその時々容認性を判断することが不可欠であるように思われる。文法研究分野が用いる二つの研究手法を言語教育分野で応用するありかたも、今後の課題とする。

## 注

- \* 本稿は CAJLE2023 年度年次大会（於モントリオール、2023 年 8 月 17 日）において口頭発表した「現代日本語の格助詞と接続助詞の機能的重なり－逆接的表現の容認度調査から－」を修正・拡張したものである。発表時のコメントおよび査読者のご助言に感謝申し上げます。また、本研究は JSPS 科研費 JP20K00634 の助成を受けたものである。
- 1. 本研究の実例収集は、筆者が選定した小説・エッセイ・新聞等の書き言葉媒体および筆者作成の自然会話資料の他、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下 BCCWJ と記す）』『名大会話コーパス（NUCC）』『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』『日本語日常会話コーパス（CEJC）』を利用した。内省判断調査は 2018 年～2023 年に全 9 回、計 4 大学の大学生（各回ごとに異なる日本語母語話者、出身地は非限定）に実施した。①2018 年調査 70 人、②2018 年調査 67 人、③2018 年調査 16 人、④2018 年調査 32 人、⑤2019 年調査 120 人、⑥2023 年調査 65 人、⑦2023 年調査 59 人、⑧2023 年調査 20 人、⑨2023 年調査 33 人。⑥～⑨の 4 回の調査が、本研究のために新たに実施した調査である。
- 2. その他にも古代語における格助詞ヲの接続助詞化については近藤（2000）、佐伯（2024）等がある。本研究ではそれらの現象とは別の、現代における格助詞から接続助詞的用法への拡張現象を論じるものである。

3. 本研究では、実際には出現していない動詞の意味を実際に出現している述語の意味を変えて解釈することを「創造的な解釈」と記しているが、後述するように、全く述語が出現していないのにある動詞の意味を「補って解釈する」場合もある。このどちらも、ガ・ヲが格助詞だとするとそれと結びつく述語がないのにその述語の意味を類推により「解釈している」点が重要である。
4. (16) (17) は恩恵授与を表す「てくれる」を用いて「晴れてくれれば」「桜が咲いてくれれば」とすると容認度が上がる。これは天気や桜に意図性を付与するからである。このことも、《仮定行為非実現》用法に意図的行為の意味が必要であることを示している。また、査読者から主節述語句に意図的行為〈しない〉の意味が解釈しにくい実例のご指摘をいただいた。下記 (i) ~ (iii) のいずれもモノヲで終了する例であるが、前二者は「さっさとできるものをできない」「どこにでも行けるものを行けない」のように可能動詞述語の意味が補えるものである。詳しくは今後の課題とするが、可能動詞述語句は〈意図的行為〉+可能〉という意味の二重性があると本研究では位置づけておく。「読書が／をできない」「本が／を読めない」のようにガ・ヲのいずれとも結びつく問題とともに、その意図的行為性については改めて考察したい。また (iii) は「思いつめなくてもよいものを思いつめる」と補えるものであり、積極的意志とは言えないものの、動作主の意志に責任の帰せられる事態を表すものと位置づけておく。このように本研究で用いた〈意図的行為〉の概念に、一般に他動詞が持つ他動性の強弱と同様に、程度差・質の違いがあることは、今後さらに研究していきたい。
  - (i) 自分ひとりなら、なんでもさっさとできるものをもとどかしかった。
  - (ii) 「これが動けば風に晒されることなくどこにでも行けるものを…」
  - (iii) 「…なにもそこまで思いつめずともよいものを…」
5. 接続助詞モノヲとして本研究の《仮定行為非実現》を詳述するものに松下 (2022, 2023) がある。また、天野 (2023) はヲ格構文の拡張という観点から《仮定行為非実現》以外の逸脱的なモノヲ文も含め説明している。しかし、古代語モノヲと現代語モノヲの関係を考慮した詳細な研究はなく、ここで述べる本研究の考察の検証は今後の課題と考える。
6. 『日本国語大辞典第二版』にはモノの「一般的・平均的なもの」という意味の初出例として蜻蛉日記 (10 世紀)・源氏物語 (11 世紀)・浜松中納言物語 (11 世紀) の例が挙げられている。
7. 天野 (2021a) では BCCWJ の白書に 23 例のモノガの《変遷》自動詞構文の例があり、うち 1 例が逸脱的な例であることを述べている。本研究では改めて「ものが」を BCCWJ で検索した結果、新聞・書籍・ブログに各 1 例ずつの《変遷》自動詞構文の例を認めたが、逸脱点はなかった。ノガに比べモノガの接続助詞的用法への拡張は実例ではほとんどないと言ってよい。ただし、1 例でも存在したこと、接続助詞的なモノガ文の作例の容認度がノガと同様に状況により上昇することから、ノガと同様の構文的拡張が考えられるものと本研究では判断している。なお、《変遷》自動詞構文のモノガ文が白書に偏って現れる理由は、天野 (2021a) がモノとノの意味的異なりから説明している。
8. ノヲ・モノヲの対比性・逆接性を実例により詳述するものとして申 (2017)、松下 (2023) 等がある。その逆接性の由縁を述べるものとして、ノガについては天野 (2021b)、ノヲ・モノヲについては天野 (2011, 2019) がある。ノガ・モノガ・ノヲ・モノヲがベースとする構文の意味を離れ、単なる対比を表すまでに拡張しているかについては議論の分かれるところであり、今後も検証を重ねる必要がある。

## 参考文献

- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』 ひつじ書房
- 青木博史 (2018) 「準体助詞「の」の発達と定着—文法化の観点から—」 高田博行・小野寺典子・青木博史 (編) 『歴史語用論の方法』 141-164 ひつじ書房
- 天野みどり (2002) 『文の理解と意味の創造』 笠間書院
- 天野みどり (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』 笠間書院
- 天野みどり (2014) 「接続助詞的な「のが」の節の文」 益岡隆志他 (編) 『日本語複文構文の研究』 25-54 ひつじ書房
- 天野みどり (2019) 「逸脱的ノヲ文の〈他動性〉と〈対比性〉」 『大妻国文』 50, 1-18  
<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6850>
- 天野みどり (2021a) 「主格節構文の多様化と名詞性との関係—「白書」のモノガ文とノガ文—」 『大妻国文』 52, 21-36 <https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7026>
- 天野みどり (2021b) 「逆接の意味と構文—逸脱的なノヲ文・ノガ文の意味解釈を中心に—」 天野みどり・早瀬尚子 (編) 『構文と主観性』 241-260 くろしお出版
- 天野みどり (2023) 「接続助詞的な「ものを」の文の意味」 『大妻国文』 54, 1-20  
<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7512>
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』 岩波書店
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』 ひつじ書房
- 加藤重広 (2006) 「対象格と場所格の連続性—格助詞試論 (2)—」 『北海道大学文学研究科紀要』 118, 135-182 北海道大学文学研究科  
[https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/34104/1/118\\_P135-182.pdf](https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/34104/1/118_P135-182.pdf)
- 黒田成幸 (1999) 「主部内在型関係節」 『ことばの核と周縁—日本語と英語の間』 27-103 くろしお出版
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房
- 佐伯暁子 (2024) 『日本語助詞「を」の研究』 ひつじ書房
- 佐治圭三 (1993) 「「の」の本質: 「こと」「もの」との比較から」 『日本語学』 12 : 11, 4-14 明治書院
- 信田知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について」 『国語学』 82, 29-41

申義植 (2017) 「複合助詞ノヲにおける格助詞用法と接続助詞用法の連続性について」

『日本語の文法』 17:1, 71-87.

坪根由香里 (1996) 「終助詞・接続助詞としての「もの」の意味ー「もの」「ものな

ら」「ものの」「ものを」ー」『日本語教育』 91, 37-48.

寺村秀夫 (1978) 「「トコロ」の意味と機能」『語文』 34, 10-19. (『寺村秀夫論文集

I』 (1992) 321-336 くろしお出版所収)

寺村秀夫 (1981) 「「モノ」と「コト」」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館

書店 (『寺村秀夫論文集 I』 (1992) 75-93 くろしお出版所収)

藤井聖子 (2008) 「話しことばの談話データを用いた文法研究」長谷川寿一他 (編)

『こころと言葉ー進化と認知科学のアプローチ』 129-149 東京大学出版会

松下光宏 (2022) 「接続助詞「ものを」の文脈における用法と事態の特徴」『日本語/

日本語教育研究』 13, 49-64. [https://www.cocopb.com/download/13\\_04\\_matsushita.pdf](https://www.cocopb.com/download/13_04_matsushita.pdf)

松下光宏 (2023) 「接続助詞「のを」「ところを」「ものを」の対比性」『日本語文

法』 23:1, 172-188.

レーバンクー (1988) 「『の』による文埋め込みの構造と表現の機能」くろしお出版

## 調査資料

佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大竹雅夫・山崎福之校訂 (1999) 『萬葉集 1』新日本

古典文学大系 1, 岩波書店

坪田譲二・桂ユキ子 (1996) 『あまから抄』富山房

日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』小学館